

## はじめに

RICH NEWS 第2号は、平成17年に入ってから  
の活動概要をまとめております。

旧日向別邸(熱海市)の調査と報告書の取りまとめが主  
たる活動となりました。この業務は自治体から初めての  
受託業務であり、また、東京理科大学との協同作業でも  
あり、活動を進めていく上で手探りの状況ではありまし  
たが、無事完遂することができました。今後の法人活動進  
め方の一つの方向性を示すものとなりました。

徐々にではありますが、法人活動も車輪が回り始めた  
感があります。会員皆様の参画により、さらに内容ある  
活動にしていきたいと考えています。

## 活動概要

これまでに旧日向別邸の調査、報告書作成、および  
三宅文庫曳家工事現場見学会を実施しました。また、  
報告会、講演会を3件予定しております。

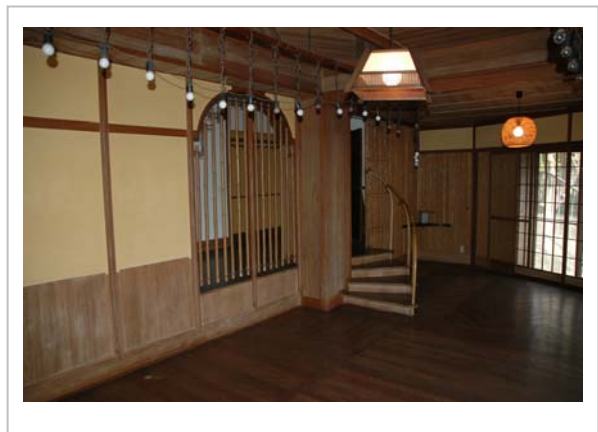
このほか、会員皆様にご意見等を発信していただく  
場として、法人ホームページ内に「NPO-RICH フォーラ  
ム」を開設しました。大いに活用していただきたいと思  
います。以下に主な活動について報告いたします。

### ■ 調査業務および報告会

#### [旧日向別邸保存修復予備調査業務]

平成17年2月に旧日向別邸の今後の保存活用を検  
討するための基礎資料を作成する目的で、熱海市より  
「旧日向別邸保存修復予備調査業務」を委託されまし  
た。

この建物は、実業家日向利兵衛(1874~1939)の熱海の  
別荘として、昭和9年から11年にかけて建てられた木造  
2階建、鉄筋コンクリート造地下1階の住宅建築です。



木造2階建の上屋は、銀座和光や東京国立博物館の  
設計で知られる建築家渡辺仁(1887~1973)の設計、地  
下室内部は世界的に著名なドイツ人建築家ブルーノ・  
タウト(1880~1938)の設計によるものです。

当初の図面や写真、実測図面等の既往の資料調査、  
史的概要調査、建物各部の破損・劣化調査などの現況  
調査を行うと同時に、地階の躯体と地盤の耐震性につ  
いて構造診断を実施しました。これらの調査結果をもと  
に報告書を作成しました。

地下躯体の構造補強に関しては調査報告を基に、既  
に工事が進められています。

この報告書が今後、旧日向別邸の保存活用検討の一  
助になればと考えています。

## <報告会のご案内>

### 熱海市指定文化財旧日向別邸公開記念・

#### 旧日向別邸予備調査報告会

#### ブルーノ・タウト「旧日向別邸」の魅力を探る

- 日時 平成 17 年 12 月 10 日(土) 14 時～17 時
- 会場 熱海起雲閣「ギャラリー」  
(熱海市昭和町 4-2)  
(<http://www.kiunkaku.com/>)
- 講師 伊藤 裕久 (東京理科大学 教授)ほか
- 参加申込 mail:[info@npo-rich.jp](mailto:info@npo-rich.jp)  
または FAX:03-3820-5955

NPO 法人歴史建築保存再生研究所

- 参加費 無料
- 主 催 NPO 法人歴史建築保存再生研究所  
(<http://www.npo-rich.jp/>)

- 後 援 熱海市文化交流課

本年 9 月 23 日に旧日向別邸が一般公開されました。この公開を機に、今回、当研究所が取りまとめた調査報告書をもとに、旧日向別邸の魅力と価値について報告会を開催することにいたしました。本法人会員の方々をはじめ、タウト、旧日向別邸に関心を寄せる多くの方々の参加をお待ちしております。

\* 注意: 今回の報告会において、旧日向別邸の見学会は含まれておりません。見学を希望される方は、当日午前中の見学をお勧めします。

## ■見学会

### [旧三宅雪嶺邸三宅文庫曳家工事見学会]

- 日時 平成 17 年 11 月 10 日(木)

第 1 回 13 時 30 分～14 時 30 分、第 2 回 15 時～16 時  
東京都指定文化財・旧三宅雪嶺邸三宅文庫の保存改修工事に先立ち実施される曳家工事見学会を、施工を担当する清水建設(株)殿のご協力により実施しました。

この建物は、明治中期から昭和戦前にかけて活躍した近代日本を代表する哲学者、評論家、ジャーナリストで「日本及日本人」の主権者である三宅雪嶺の旧宅跡に建つ文庫です。鉄筋コンクリート造 2 階建、地下 1 階、建築面積 26.662m<sup>2</sup>、延床面積 64.152m<sup>2</sup>の建物で、竣

工は昭和 5 年、基本設計は今井兼次です。

近代建築(鉄筋コンクリート造)の曳家はめずらしく、あまり見学の機会もないことから、第 1 回、第 2 回とも各々 30 名を超える多くの方々のご参加を頂きました。

三宅文庫の概要、曳家工事の説明の後、実際に曳家の状況を見学しました。建物基礎は増設、補強されており、建物総重量は 317t(うち既存建屋重量は 140t)、基礎下部 9 ヶ所でコロにより建物を支え、レール上を 3 台の油圧ジャッキにより押すことにより移動していきます。1 回のストロークで 60cm 進み、見学時には 2 回のストロークにより約 1m 移動しているのですが、あまりのスムーズさにほとんど移動していないのではないかとの錯覚におちいりました。3 日間で約 22m を移動し、その後 24 日から建物全体を 2m 押し上げる工事が行われます。

実際にこのような工事を見学することで、歴史的建物を保存、移築する上での施工技術をより深く理解できたと思います。今後も、このような機会を設けていきたいと考えています。



## ■講演会の予定

### [近世城郭の保存と修復]

#### -石垣に残された九州の近世城郭史-

- 日時 平成17年12月5日(月)  
15時～17時30分
- 場所 清水建設技術研究所
- 講師 高瀬 哲郎  
(佐賀県立名護屋城博物館学芸課長)  
安河内 孝  
(清水建設(株)土木事業本部)

高瀬哲郎先生からは、「石垣に残された近世城郭史—九州の城にみる豊臣秀吉の影」と題して、歴史的な観点からの城郭史についてお話を頂くとともに、均整城郭の保存修復の事例や名護屋城の発掘調査についてお話いただけることになっています。

石垣の保存修復に関わっておられる安河内 孝氏からは、石垣の構造、積み方、石垣の勾配などのお話に加え、皇居中之門修復工事の概況についてのお話をうかがいます。

- 参加申込 E-mail:info@npo-rich.jp  
または FAX:03-3820-5955  
NPO 法人歴史建築保存再生研究所 まで
- 資料代 1,000 円

### [(仮題)歴史的建造物を取巻く状況と今後の展望]

- 日時 平成18年3月17日(金) 午後
- 講師 後藤 治 (工学院大学教授)  
詳細が決まり次第ご案内します。

後藤治先生は、もと文化庁建造物課におられ、登録文化財制度の立ち上げに貢献されました。工学院大学に行かれてからも、NPO(桐生)に参加されているほか、各地の歴史的建造物保存のプロジェクトに参画、支援され幅広い活躍をされています。

---

## ◆平成17年度 理事会・総会 報告

平成17年度 理事会、および通常総会が平成17年6月28日 午後3時より、東京目白にある、歴史的な建物である「日立目白倶楽部」で開催されました。

平成16年度の事業報告及び収支決算、平成17年度事業計画及び収支予算が主な議案でした。

両議案とも、審議の結果承認されました。

総会后、午後5時より、同会場にて会員懇親会を開催しました。約30名のご出席をいただき、和気あいあいとした雰囲気、2時間ほどの楽しい時を過ごすことができました。

来年度も同様なかたちで懇親会を開催する予定です。ぜひ皆様のご出席をお願いいたします。

### ■会員募集のご案内

特定非営利活動法人歴史建築保存再生研究所では、活動主旨に賛同される方、また関心のある方には、ぜひ会員となって活動を支えて頂きたいと思っています。

入会をご検討される方は、下記、問い合わせ先までFAX、またはEメールでご連絡ください。募集要項をお送り致します。

お問い合わせ

特定非営利活動法人歴史建築保存再生研究所 事務局

FAX:03-5245-1996

Eメール:info@npo-rich.jp

## ■ 寄稿

### 「日本建築 400 年転換説」

当NPO法人 理事長 藤盛紀明

菊竹清訓先生の『日本型建築の歴史と未来像』(学生社、1992)は非常に面白い本です。この本で先生は建築デザイナー(ご本人は作家とおっしゃっているが)の目で見ると日本建築はおよそ400年ごとに大きく変化していると言っています。内容は様式変化に着目した議論で「なるほどなるほど」と思わず頷いてしまうものです。ではその様式変化が何故起こったかがポイントです。この原理が判明すれば次の時代の建築様式が推定できるかもしれません。

紀元前後の竪穴・高床の弥生住宅、4世紀の神社建築、8世紀の寝殿造、12世紀の書院造、16世紀の民家と数寄屋、そして現在は21世紀、400年理論によれば様式変化がすでに生じて良い時期なのです。ただし菊竹先生のこの本は今から13年前の1992年に出版されたものですから先生は20世紀に何か新様式が起こることを予想しています。

何故様式変化が400年周期で起こるかの菊竹先生のお考えを筆者なりに理解をしてかいつまんで説明しましょう。

ヨーロッパの建築は独創性に価値を置いています。一方日本建築は調和にウエイトを置いています。調和を大切にす日本の場合には以下のようなメカニズムで、社会が建築様式を作っていきます。まず大多数の人が参画してある社会システムが構築され、その社会システム中で新しい文化が創造され、その文化が普遍的な建築様式を生み出すと言う仕組みです。

さらに400年ごとの建築様式の変化は外来文化を豊富に吸収した後起こっています。太平ムードの中で新しい型が生まれるわけではなく、激しい文化包摂を経過して起こります。

現代から一時代前(400年前)の大変化は町人文化の台頭でした。それによって出現した建築様式は形式の自由を求めた「数寄屋」でした。これが16世紀の話なのです。従って20世紀、21世紀には何かが起こるはずで、今は21世紀に突入しています。そろそろ大変化

の時期なのです。それはどんな様式でしょうか。建築様式は集団の大きな変化を背景にして変化するという考えは幾人かの人が主張しています(例えば、前場幸治『大工今昔』冬青社、1992)。

今、目につく住居建築は超高層マンションです。これは人間の大都市集中という社会現象の象徴のように思われます。21世紀に現れた新建築様式とは住宅団地の延長上にある高層マンション群でしょうか？

私が21世紀に期待するのは、多様な個性を持つ建築空間、そして多様な人が住む個性ある街区や都市空間です。自然と融和しつつ、豊かな精神生活をおくることのできる空間の構築を夢見ています。超高層マンション群でもそのような空間構築の出来る技術の開発が必要です。

●原稿を募集しています。

歴史建築保存再生研究所では、活動に関連する、経験談・意見・感想・見学手記など、さまざまな原稿を募集しております。原稿の体裁は問いません。事務局までお送りください。よろしくお祈いします。